

JAPAN URBAN DESIGN  
INSTITUTE

## 都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10

本郷瀬川ビル TEL 03-3812-0033

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

# JUDI

## 064

20.JANUARY  
2002

特集  
景観から環境へ 今デザインが問われている

発行者: 都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

- 特集: 景観から環境へ今デザインが問われている
  - 1. 朝日町の場合～エコミュージアムから環境へ … 1
  - 2. 景観から環境へ … 4
  - 3. 屋上緑化の考え方は環境から景観へ … 6
  - 4. 景観から環境へ … 8
  - 5. 新潟の景観を育む展開を展望する … 10
  - 6. 都市環境における車体広告について … 12
  - 7. 仮囲いのデザインの魅力 … 14
  - 8. 公共サイン整備におけるリニューアルの試み … 16
  - 9. 情報化社会の景観を考える … 18
- ブロック例会レポート … 20
- 訂正 … 20

## 特集: 景観から環境へ 今デザインが問われている

これまでの都市環境デザイン会議の「JUDI」誌上で、景観に関する議論は数々行なわれた。しかし、その内容はそれほど多様では無かったような気がする。初期には、景観条例の問題の議論があり、最近では、京都の景観問題や例の「ポンデザール計画」(鴨川芸術橋)が印象深い。

景観の議論は、都市デザインの原点であるものの、どうしてもスタティックな傾向になり勝ちである。「景観を守る」「景観を再生する」など、景観規制や景観ガイドライン、歴史景観地区の保全等の守備的方向である。これは、非常に重要なことであるものの、能動的な景観形成論が議論されない傾向にあったと言える。

近年、「景観条例」を天下の宝刀として都市

デザインを語ることの限界が認識されつつある。一方、「エコロジー」や「サスティナブル」と言った「環境」への認識が景観にあたえる議論が「住民参加」を含めて、徐々に出始め、景観の議論が少しづつ変質し、多様化してきたように思う。

つまり、受身としての景観から能動的な景観論へ、その視点として「環境」が大きなキーワードになってきた。

都市デザインが、ゴミ問題や循環型社会システムと連動しており、景観を構成する部材から問い合わせなおすことになってきた。

今回の特集は、必ずしも「環境」だけにシフトしていないが、能動的に景観を議論するきっかけになればと思っている。

(担当: 櫻井 淳、近田玲子、吉田慎悟)

### 特集

朝日町の場合  
～エコミュージアムから環境へ～

元倉眞琴  
MAKOTO MOTOKURA  
(株)スタジオ建築計画

### ■エコミュージアムによるまちづくり

自然との共生や生涯学習による町づくりを唱っている町は多いが、朝日町はそれを一步進めて、「自然と人間が共生し、しっかりとした暮らしを築くエコミュージアムのまち」(第4次総合発展計画)というようにエコミュージアムの理念をまちづくりの軸にしている。

エコミュージアムとは、1960年代にフランスのG.H.リヴィエールによって発想された博物館の新しい形式で、伝統的な博物館がものを収集、保存、展示するという学術的、管理的であったものに対して、ものがある現地で保存、展示し、地域住民の運営を通して地域の発展に寄与するものとされている。つまりエコミュージアムの概念は、地域の環境学習を通してまちづくりを

考えるものである。

朝日町では「町がまるごと博物館で、町民はみんな学芸員(案内人)である」と説明されている。自分たちの身近な環境を見つめ直す中で、町や自然の良さや歴史の大切さを見直していく。そのことを通して、風土と暮らしに誇りを獲得していく。それを「まちづくり」のベースにしようとする試みである。

もともと、意識ある数人の人によって始めたエコミュージアムの活動も、2001年にNPO組織である「エコミュージアム協会」へと展開し、新たな段階に入りつつある。

■エコミュージアムコアセンターのねらい  
こんな先進性をもった「まちづくり」の意識を背景に、朝日町エコミュージアムコア

センターのプロポーザルコンペがもたれた。施設としてはいわゆる生涯学習施設なのだが、それをエコミュージアムのコアとして位置づけようというものであった。私たちの提案は、エコミュージアムの概念そのものを建築化できないか、というものであった。大きな自然と、人の手の入った半自然と、人工的な町が、とても良いバランスを持っている朝日町そのものをモデル化しようとした。

丘陵のように、建築を自然の一部として扱いながら、同時に都市のコアを形成するために、街そのものである様な建築を目指した。内部空間は「都市の縁側」としての「フォーラム」を軸にまとめられている。

#### ■ワークショップで分かったこと

「設計者はハコをつくるところまで」というのではなく、施設の使っている様子を追いかけたいし、使い方への提案もしていきたい。これを縁として、専門的な立場でもう少し広く町に関わりたい。ということをアピールして、「朝日町土地利用マスター プラン」の基礎調査である「まちあるき

ワークショップ」の作業に関わらせてもらった。不慣れな私だけでは手に負えないでの、櫻井淳氏の協力を仰いだ。2001年の7月から9月にかけて3回のワークショップがもたれた。

第1回は「まちについて改めて考えてみよう」ということで、「まちの良いところ悪いところ」のリストアップと「まち歩きのルートの検討」

第2回は「まちを見て課題と方向性を考える」で、実際にまちを歩き、その後課題を整理した。

第3回は「提案（プロジェクト）の検討と具体化」で、まちを良くしていく具体的な方策が検討された。

スタッフも入れて約30～40人のメンバーが参加した。回数が少ないせいで具体的な提案を詰めきるところまではいかなかつたが、朝日町中心地区の問題点の整理と方向性はかなり整理された。

まち歩きのワークショップは貴重な体験で、これを通じて分かったことが幾つかある。当たり前のことだが、普段そこに

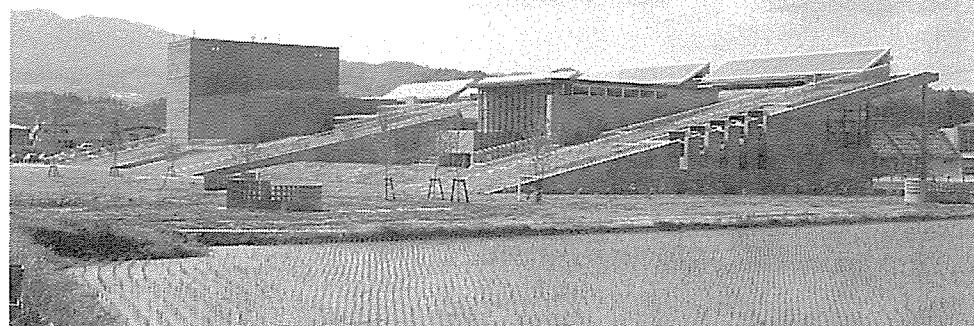


写真1：エコミュージアムセンターの外観（丘陵化された建築）



写真2：内部（活動の様子）

住んでいる人たちは、日頃自分たちの環境についてあまり考えたこともないし、他の人と話し合ったこともないようだ。それだけ環境に問題がないからかもしれない。しかし今回のように改めてまちを歩き、考え、話し合うと、自分たちの環境の良いところに気づくとともに、様々な問題点にも気づく。そして将来へのヴィジョンをもたなければないと感じる。

みんなで話しながら歩くことで、お互いに学習し合い、共通の認識がつくられる。さらに興味深いのは、地図をもちらながら歩き、地図を前に置いてディスカッションすることで、今までそれぞれの人が勝手に自

分の頭の地図（イメージマップ）で判断していたものを、共通の地図という空間モデルで考え始めるようになることだ。そして様々なまちの良いところ「財産」と、良くないところ「負債」とを、プロットしていく中で、それぞれの要素が、お互いに空間的に関連しあっていることに気づき、新しいネットワークをつくるなければならないと考え始める。

みんなでまちを歩くことで、エコミュージアムの概念をより生活の中に定着させる事ができるのではないかと感じた。

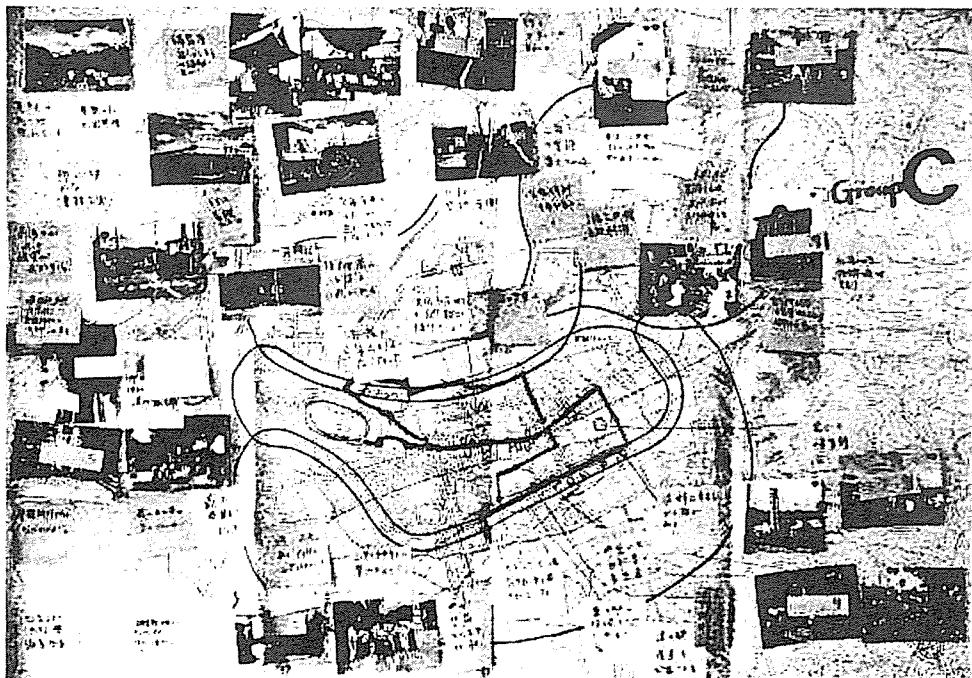


図1：まちあるきのあとの検討

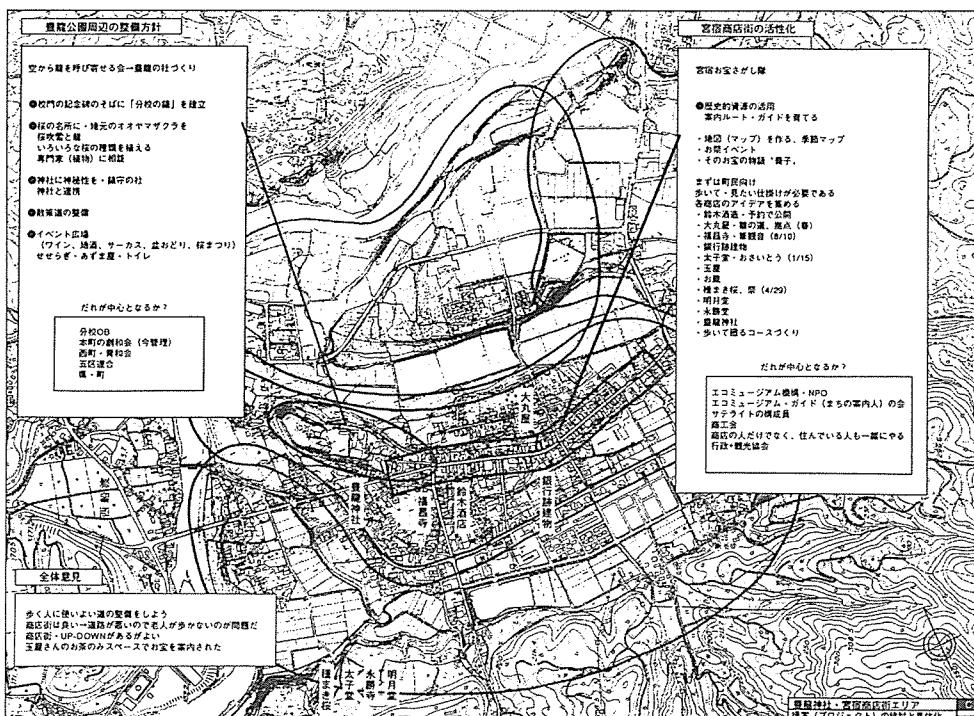


図2：宮宿中心部への提案

## 景観から環境へ

井上洋司

YOUJI INOUE

(株)背景計画研究所

### ■景観から環境へなんてわからない

景観から環境へというテーマを聞いたとき、前回関西支部の都市緑化のアンケートを思いだした。CGで作られた都市の建物の緑化は結構奇妙に見え、わざとらしく思えた。

そのアンケートでも言外に言ったのだけど、今の建物を単に緑で覆う事は、必要な行為ではあろうけれど、それによってその建物がその場所にふさわしい佇まいになっているかどうかは、わからないと。日本の民家と屋敷林をはじめとする緑との関係がある美しさを持つに至るには、それ相応の時間が必要だったことを考えても、今の近代建築群が緑化と景観をいつにするにはもう少し時間がかかりそうだ。つまり緑化された建築が作り出す景観が風景やさらに人との関係も含めた環境までをも作り上げるにはさらに時間がかかるだろうと考える。

### ■三つの図

それでは環境と景観の関係とはどんなものなのか・誤解を恐れずに、きわめて簡単な例を図示してみる。ともに丸と直線で描かれた図がある。(図1から3参照) 景観を物としてのデザインと捉えた場合、一見1と2が同一で、1と3が異なると考えるだろう。ところが関係性だけに注目すると、つまり○と線が交わっているかどうかを問題にすると、1と3を同一と考える思考形態もある。環境とは景観に比べどちらかといえば1と3が同一と考える思考形態の中に存在しているのではないだろうか。でも一時代前、一方でこんな解説を読んだことがある。

『…建築の技法が存在するように「関係の技法」が存在するに違いない。その目的は建物、樹木、自然、水、交通、広告など、あらゆるエレメントを活用して環境を創造することである。』と『都市の景観』という本でゴードン・カレンがいっている。

同じ関係の技法でも、あらゆる環境構成の物的エレメントの関係を整える事によって環境を創造する。これを都市の景観の創造としている。

さーわからない。どなたか教えてもらいたい。

そもそも景観だってまだ未消化じゃないですか！環境関係の法律だって結構怪しい。

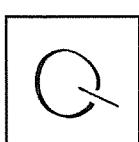


図-1

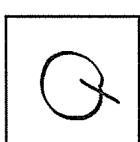


図-2



図-3

結局こんな訳で、小生はわからないままこの原稿を書き出す羽目になったようだ。

### ■二つの試み

□その1 場所の再生－成田のお茶屋さんここ十年近く成田の表参道に関わってきた。その一部の成果として去年、電柱の地下埋設が限られた範囲ではあるが達成された。地元市民にとっては、15年来の目標がやっと成就したことになる。そのきっかけは、街作り協定書の締結である。1997年に締結されたこの協定書には、ある種のデザインコードが付加されている。この協定に従い本来であれば数多くの個店が改造計画をスタートする予定であったが、景気の冷え込みは個店にその決断を鈍らせた。そんな中、つれあいをなくされた女ご主人の小さなお土産屋さんは勇気を持って、この協定書に付随する整備制度を初めて本格的に活用した。

ここで大きな仕事は、新たな商売の空間を作ることにあった。今まで何十年も、成田の名物である羊羹の販売を主に手がけてきた参道に面するお店を、その経営形態を引き継ぎながら、なおかつ別の経営を始める場を設けることを試みた。かといってそなご主人に頼まれたわけではない。どちらかと言えば、この町を長年見てきた此方からの提案である。事前と事後の写真(写真1,2)を見ればわかるが、時として長年住み慣れた空間の評価は見誤りがちである。この店主も例外でなく、竹藪をまさに藪としか考えず、どうしようもない物と考えていた。それが今ではこの町に来る人にとって知る人ぞ知る場所になっている。

またその庭に通ずる路地をもうけた。(写真3,4) その奥で茶屋をやることは、間口で商売をする参道門前店舗では相当の抵抗があった。はじめからこの店の方が、従来の店舗よりいずれ売り上げが、のびることはわかっていたが、路地を抜けた裏庭でのオープンカフェの売り上げをメインに考えることは店主にとって難しい物だった。しかし同時に此を成立させることのない計画は、奥のある町が魅力的であることを考えると、意味がないと判断して、店主と協議を繰り返した。

建設当時の建築物に改修された店は、参道のスカイラインをつなぐ役割を果たしてくれた。かつてパラペットを活用した看板建築が、個々の建築を引き立たせるだけの意味しか持っていないかった事が、その結果明らかになってしまった。(写真5,6) 町並みをつなげる形は、明らかにかつての下屋の再生によってなされた。



写真1: 竹藪は荒れ放題だった。

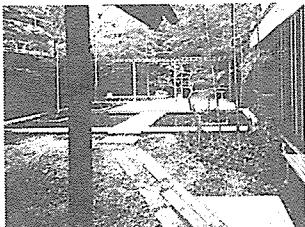


写真2: 平池の水源はうち捨てられていた裏山の浅い井戸水だ。



写真3: 間口勝負の商法は貪欲に店間口を確保し、駄菓子を売っていた。



写真4: 井水からの距いの水音が路地の存在を静かに語る。



写真5: 下屋の上に鉄骨のフレームを立て、二階を真っ暗にすることで、近代的な建物を模倣していた。



写真6: 隣との屋並が繋がり、路地で切られているはずの町並みが何故か繋がって見える。

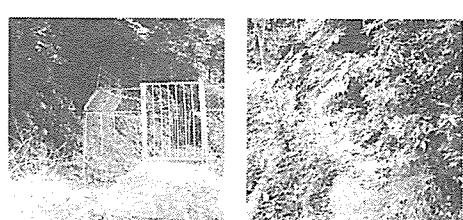


写真7,8: 荒れ放題の緑の中、金網の中の池は、蚊の温床にこそなれ、長い間人から忘れられた存在だった。



写真9,10: 溝水の池は公道に面して、街にもその存在を顕在化した。

**すだれ沼観察シート observation sheet of SUDARENUMA**

<b>導き</b> guidance	<b>水 water</b>	<b>植物 plants</b>	<b>生物 creatures</b>
1 観察 observation	すだれ沼の水はぐるりと回る YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA	すだれ沼の木はぐるりと回る YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA	すだれ沼の生き物はぐるりと回る YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA
2 実験 experiment	すだれ沼の水はぐるりと回る YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA	すだれ沼の木はぐるりと回る YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA	すだれ沼の生き物はぐるりと回る YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA YUKI NO TSUBAKI NO HANA
3 まとめ summary	すだれ沼から 水音をぞえよう。	すだれ沼から 木音をぞえよう。	すだれ沼から 生き物をぞえよう。
	P.7-8	P.9-10	P.11-12

おもしろい植物  
おもしろい動物  
おもしろい生き物

そして路地を入って生まれたもう一つの店は、成田の名所として、新聞にまで紹介されるようになった。新たな場所が誕生したといえる。

#### □その2 場所の発見－学校の湧水の池

この学園内の池はかつては危険な場所とされ、(写真7,8) 鉄条網と金網で閉鎖されていた。学園の後援会が、ここを整備することを考え、その結果生まれたのがこの空間である(写真9,10)。

多摩川の河岸段丘の端からあふれ出すわき水を僕たちはどう認識したらいいかを考えて、そこに自生する植物は何かを学び、動物や鳥や昆虫は何かを知り、そしてこの場所がなん何なのかをもう一度認識するためにここの土地利用を学び、場所を発見する。そんな空間としてこの小さな沼を再生できればいいと考えた。

そのためには整備にあわせて、ここの湧き水の調査や動植物の調査を行い、その調査結果を踏まえ、学校で活用出来るこの沼だけのテキストを制作する事になった。(写真11)

この二つのケースは、一つはかつての景観を再生しながら、新たな場所を生み出す行為、もう一方は場所に対する認識を育てる事を試みた例である。ともに固有の場所を作ろうと思って計画した。環境と景観の違いはわからないままだが、デザインそのものだけが自立して歩き出すわけでもなく、その場所を認識する手だけとしてデザインが存在するなら、その方法はまだまだ広がるだろう。テキストまで作るのもその一つであるかもしれない。

そんな時、○と線が織りなす図形を見かけて似てる似てないというような、表層的な議論でない物が求められるような時代になっている事は確かだと思う。

写真11: テキストの一部・水、植物、生物をキーにこの空間の意味を考えられるようなテキストを目指した。

## 屋上緑化の考え方 環境から景観へ

須永 哲子  
YOSHIKO SUNAGA  
(株)TALO 都市企画

### ■環境配慮の条例化

東京都では平成13年4月から、敷地が1000m<sup>2</sup>以上の建物について、地上部の緑化のみならず屋上の利用可能な面積の20%の緑化を義務づけた。ヒートアイランド現象の緩和やCO<sub>2</sub>削減、大気の浄化、雨水貯留の効果を上げるためである。これまで地上部の緑化のみの規制であったが、それ以上に緑化空間を増やすことで都市の環境に対する負荷を少なくするための方策である。都市開発（特定地区、再開発地区計画、高度利用地区、総合設計制度）における容積率の割増、社会福祉施設、病院、学校、事業所などの民間施設の新たに行う緑化の工事費費用の一部助成、固定資産税の軽減、中小事業者や事業協同組合などには、屋上緑化の事業費などの融資も行っている。

### ■渋谷区の試み

これに対応して渋谷区では、昨年6月に神南庁舎の既存建物を使い、屋上緑化実験を始めた。屋上緑化といつてもいろいろなシステムがあるため、各方面的業者の協力を得て見本園を作り、一般公開することで屋上緑化の効果測定や、実施計画の参考にしてもらうためである。そこでは菜園実験も行い、トマトやスイカなども作った。ねらいが当たり見学の申し込みが殺到、担当者はうれしい悲鳴をあげていた。

### ■23区では助成金を出す区も

積極的に助成金を出しているのは北区、板橋区、中央区、豊島区の4区である。一番金額の多い北区は、上限100万円まで助成するそうで平成6年から行っているとのこと。3m<sup>2</sup>以上緑化すれば適用対象となり、一昨年の平成12年は申し込みが多かったため補正予算を組んだほどだそうである。



写真1：菜園も（神南庁舎）

個人が対象となり個人所有のビルでも可能であるが、分譲住宅では全員の同意が必要となる。

中央区は前年度まで上限250万円まで助成していた。昨年は3件が利用したようである。

今後できるだけ多くの人に利用してもらうことを考え、今年から対象範囲を300m<sup>2</sup>以上の開発とし、上限を50万円に変更した。"環境都市"宣言をしている板橋区では、対象となる建物の面積を350m<sup>2</sup>からとし、上限は30万としている。しかしトータルの年間予算は300万円のことである。豊島区は昨年から40万円までの助成がつくようになった。豊島区の場合も予算をオーバーしてしまうほど人々の関心が高かった。

この他、屋上緑化についての利子補給をしているところが1区あり、助成金の検討を行っているのが5区あった。おおざっぱに言えば、周辺にあたる区はまだ地上部を中心と考えており、高層の多い中心地域はこれから検討しようとしている区が多かった。むしろ山手線のすぐ外側くらい、居住用のマンションの多い地域のほうが熱心に実施している。



写真2：芝パレットの組み合わせ（神南庁舎）



写真3：セダムパネル（神南庁舎）

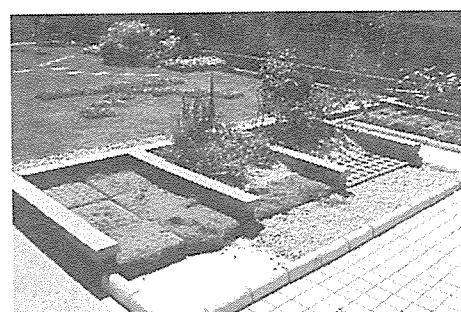


写真4：ヤシマット使用例（神南庁舎）

### ■景観として欲しい永続性

問題になるのは、管理や修繕計画である。実際に経験したことだが、マンションの一部である店舗部分の屋上緑化を、築後15年目の屋上防水改修を機に無くしたいという要望が出た。せっかく豊かに育った緑であっても、もしも漏水になった場合には管理組合が責任をとらなくてはならないからとのことであった。

屋上緑化も将来のメンテナンスに対して十分配慮して作らないと、積極的に作られた緑が将来も存続する可能性が少ないと变成ってしまう。

集合住宅の高層化が目立ってきていたため、地上からは視界に入らなかった屋上の緑が高層階からは地上部の緑と一体化して見える。メンテナンスを考えてパレット状の地被類のみの緑化が普及しつつあるが、地上部のデザインと一体化したボリューム感のある屋上部のデザインが必要とされてきているように思う。防水部分の十分な仕上げなどの技術が景観の維持に絶対に必要となってきており、公共のこうした部分への支援も必要と考える。

表1：東京23区の屋上緑化助成

区	見本園設置	要綱内記載	助成
千代田区	なし	検討中	なし
中央区	なし	条例 300 m <sup>2</sup> ～	50万
港区	なし	条例 500 m <sup>2</sup> ～	検討中
新宿区	年度内建設	○	なし
文京区	なし	都条例適用	なし
台東区	なし	検討中	検討中
渋谷区	○	条例 350 m <sup>2</sup> ～	なし
豊島区	なし	○	1万/m <sup>2</sup> 40万
墨田区	○	検討中	なし
江東区	○	都条例適用	公庫割増融資
品川区	○	検討中	検討中
目黒区	なし	検討中	検討中
大田区	○	なし	なし
世田谷区	なし	都条例適用	なし
中野区	なし	検討中	なし
杉並区	○	検討中	検討中
北区	なし	○	2万/m <sup>2</sup> 100万
荒川区	なし	都条例適用	なし
板橋区	なし	条例 350 m <sup>2</sup> ～	30万
練馬区	なし	都条例適用	なし
足立区	なし	都条例適用	なし
葛飾区	なし	なし	利子補給
江戸川区	なし	なし	なし



写真5：吸水材混入土壤を使った例（神南庁舎）



写真6：屋上防水の修繕と共に撤去されようとしている緑

## 景観から環境へ

二宮 正一

SEIICHI NINOMIYA



写真1：曳き移転された洋館と広場を利用して「まちむら交流イベント」。レインボーの野菜も

山形県の南部長井市は、昨年、生誕250年際が盛大に開催された上杉鷹山の治世下にあり、最上川舟運の物流拠点として町の骨格ができた。また古来より養蚕が盛んであり米沢織の原形を形作った地域で、自然に恵まれた人口3万人ほどの都市である。従って、市民の自然や環境に対する関心は高く、今から13年前の平成元年には「緑の地球宣言・不伐の森条例」を制定し、平成9年には県内初の「環境基本計画」の策定、一昨年の平成12年には「ダイオキシン条例」、本年度は「水源条例」の制定を目指している。こうした環境で育った私は、東京で建築設計の修行を終えるとUターンし、故郷のまちづくりに積極的に関わりながら今日に至っている。

今から8年前の'94年、私は「自然(ガイア)に近づく社会」という本を書いた。これは学生時代から建築を目指しながらも心の奥底で感じていた、人間が造り出す途方もないエネルギー、そして環境を変えていく巨大なパワーについての、素朴な疑問を書き連ねたレポートのような本である。

自然という字にガイアとルビをふったのは、当時話題となったイギリスの科学者J・ラブロックの「地球はひつの生命体である」という「ガイア仮説」にちなんでいる。

現代人間の織りなす、衣食住などの生活、それらを支える都市や産業、思潮などだが、やがて「自然(ガイア)に近づく」ように推移するだろう、そして立ち後れていた感のある行政サイドの、「人間を中心とした考え方も「自然」を軸にした考え方へ推移していくだろう、また、そうした実践がすでに日本各地で始まっている。そのようなおおまかな内容であった。友人たちが出版パーティのようなものを開いてくれ、

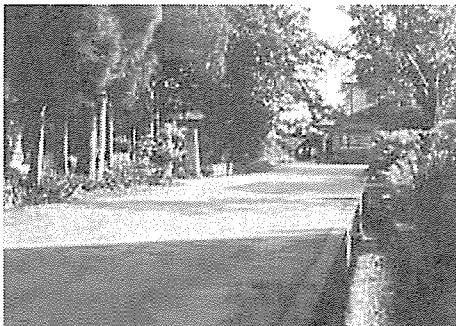


写真2：ホープ協議会の提案をうけて既存水路を壊さず整備

祝ってはもらったものの、8年前当時は、「環境が大事なのはわかるが、少し急すぎないか」、幼少の頃の恩師は本の中で行政の立ち後れについて率直に書いているので、「少し辛らつではないのか」と心配してくれた。

しかしその後、90年代後半の自然や環境に関する日本や世界の動きは、私達の予想をはるかに超える凄まじいものであり、以前は共感をもって向かえられていたラブロックの「地球生命圏をホメオスタシス(恒常的)に保っているのは生物」との説も心情的には理解できても、現実はそのような牧歌的な状況にはない、というのが国際的な認識であろう。そして遅ればせながらも、21世紀初頭の日本の目指す社会像として堂々と「循環型社会」が謳われている昨今なのである。

この変容、この様変わりの早さ、これが日本の最も特異な資質で、明治期の「近代化路線」、戦後の「復興路線」と並んで「環境型路線」の社会が実現していくかどうか。明治や戦後も、それぞれの社会が目指した夢や計画があったはずである。

「循環型社会」の目指す夢や理想の生活は、一体どんなものなのか、明治や戦後の中枢を担った人々と同様の負託が私達にいま、

怒濤のように押し寄せてきているのではないだろうか。

5年前の'97年春より、長井の中心部約5000世帯の台所から出る生ゴミを集めて堆肥にし、地域の農地に還元し、再び有機野菜として市民の台所に還す「台所と農業をつなぐながい計画」通称レインボープランが着実に成果をあげてきている。小都市とはいっても5000世帯もの市民から提供される生ゴミ（実は資源）のなかにまったくといってよいほど、生ゴミ以外のものが交じっていないことに視察者は驚く。長井では当たり前のことで、よそでは集められた生ゴミをさらに再分別しなければならないから長続きしない。長井の場合は、リーダーグループが行政と一緒に市民を引っ張っており、その根幹の考え方は、脆弱になってしまった地域の「土」を生き活きた力のある「土」に戻したい、という強烈な思いによっている。

毎年数千人にのぼる視察者と市民の交流の動きは、まちづくりや子供たちの教育の分野へと広がりをみせている。市民の間にも「循環型社会」へ向けたいろんな取り組みが見受けられるようになった。

この数年、私の活動の内容も大きく変わつたり、「環境基本計画」や「ダイオキシン条例」策定への参画、「建設リサイクル」へ向けた実践、歴史的建築物の保存活用、雪を利用し農産物を貯蔵する「雪室」施設への関わりなど、やはり、大きなくくりとして「循環型社会」へシフトしてきている。単体としての建築の創造にのめり込んで活動することも大きな魅力であり、それを願わないことはない。しかし、近代化、現代化される以前の自然と人間がわかる最後の世代として、どうしても現代技術に対して謙虚にならざるを得ない。

人間にとて何が最も必要な環境なのか、「循環型社会」という第3のステージを模索しながら試行錯誤が続きそうである。

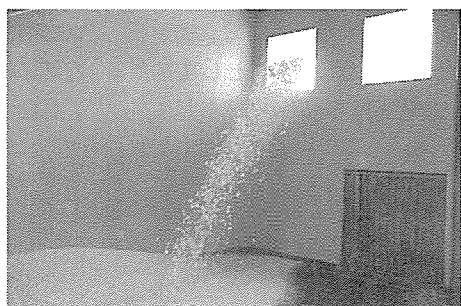


写真3：雪室—雪を利用し保存された農産物は水分が奪われないのでうまい



写真4



写真4,5：レインボーー子供の環境教育への広がりが大きい

## 新潟の景観を育む展開を展望する

横山裕

YUTAKA YUKOYAMA  
株グリーンシグマ

### ■はじめに

「景観から環境へ…今デザインが問われている」というテーマを受け、考えたことがある。景観は、「眺められるもの」・「眺める場所」・「眺める人」の関係の中で成り立つ相対的なものである。

景観も環境も、デザインとして考えれば、それほど違いはない。ではなぜ景観から環境なのだろうか。

### 景観はつまらない

景観施策、特に景観形成に関する公共事業をみると、どうも「眺められるもの」だけを対象としていることが、よく見受けられる。その方が明確で分かりやすいかもしれないが、実は現在の景観を取り巻く問題の原因は、そこにあるのではないだろうか。「眺められるもの」だけを対象として景観を扱った結果、『景観』がつまらなくなったりといつてもよい。

景観を考える立場にたって、「眺められるもの」のデザインを考えると、そこには絶対的な評価はありえない。常に「眺める人」による相対的な評価でしかない。そして本来大切なことは、景観形成という整備のあと年月を経て地域の環境として馴染むことである。そのとき正確な評価がなされるものである。

しかし景観施策等で出てくるものは、街並の調和を第一とするテクニックとしての「ガイドライン」や「マニュアル」、もしくは目立つことを第一とする周辺から図として浮かび上がる「かたち」の出現である。その「かたち」には、大抵「地域性をモチーフにした」と説明が成される。

そこには地域の質を見極め高めるための創造的な取り組みは感じられない。

### ■景観を育むデザインとは

それでは『景観』という言葉に展望がないだろうか。決してそうではない。

例えば「眺められるもの」から「眺める場所」に焦点を移してみると、どうだろか? 「眺められるもの」と「眺める場所」と「眺める人」の関係を捉えて、街の魅力を意識してもらうことを浮かび上がらせると、どうだろうか?

街の中で佇む場所、のんびり眺める場所、素敵な場所を見つけていくこと、さらにその場所を心地よい環境に整えていくこと、それぞれの場所が有する気候、地形、歴史などの地域の環境特性を活かした名所の発見、それらを地図などに記録していくことなど、魅力的な景観を育むデザインとして重要な作業である。

必ずしも「もの」をつくることだけが『景

観』の取り組みではない。

景観を育むデザインを考えると、例えば植物、照明、色彩、グラフィックなど、様々な領域の専門家同士の連携が必要になってくる。まさにそのことが景観を育むデザインの醍醐味となり、『景観』が楽しくなってくる。

ただし現状で景観を育むデザインに取り組もうとすると、ボランティア的に、またある時はゲリラ的に仕掛け続けていかなければならない。

そこに現在の問題がある。

これらの取り組みをボランティア的なまちづくり活動から、地域の魅力を高める市民事業へ転換しなければ、景観を育むデザインの限界を超えることはできない。景観的な施策の展開を公共事業だけに依存する他力本願的な展開では、地域の景観を育む、継続的な取り組みは導きだせない。「眺める人」である市民が主体的に事業展開しなければいけない時代に移ってきている。

### ■『水の都新潟』の景観育て

新潟市は「水の都」と言われている。かつて信濃川、阿賀野川の河口に街が形成され、街には堀が巡らされた街並の中で、人々が暮らした時代はそうであつただろう。しかし今の新潟市民に、「水の都」という実感があるか、甚だ疑問である。

近年の新潟市は、信濃川沿いにリユートピアが建てられ、河口の港には、万代島再開発によるコンベンションセンターの建設が進むなど、信濃川沿いの水辺空間が交流施設や芸術文化施設によって、街の中心的な環境が形成されつつある。

また信濃川には、市民株主で始まった会社が運営する水上バス「アナスタシア」が走り、より一層、シンボリックな水辺景観の魅力を高めている。

しかし一方、かつて水との関わりの中で暮らしが構成されていた「まちなか」としての新潟島では、どんどん生活の場としての雰囲気が損なわれてきている。新潟市における課題は、まさにこの新潟島において、暮らしの環境と水との関わりをどう再生していくか、といえよう。

### ■テーマとしての「堀割再生」

新潟市民の会話で、最近よく耳にする言葉がある。「堀割再生」である。かつて新潟島の「まちなか」の基盤を構成していた堀割の街並を復活させたいという市民の想いから、「堀割再生物語プロジェクト実行委員会」が誕生し、シンポジウム等の、新潟の堀割再生の取り組みが動きだしている。

しかしそこで大切なことは、「いかに、どこ

の堀を復活させるか」ではない。「どう再生していくか」である。かつて水とともに暮らしていた生活を振り返り、新潟市民の生活の場として、水路を生活の基盤として考え、意識することができるか、また堀割再生の取り組みを、行政に依存することなく、市民自ら考え、行動し、市民自らの手で、かつて埋めた堀を掘り起こそうという意識を持てるかが重要となる。

その意識を市民が共有しあえた時、初めて堀割の街並が再生されると確信している。

■ 動きとしての「にいがた寺町からの会」  
新潟にもう一つ「にいがた寺町からの会」というユニークな団体が、最近、活動を仕掛け始めている。新潟島に寺町という寺院群が並ぶ街を地域の資産として大切にし、そこから新潟の街の魅力と誇りを高めていこうという想いを持つ人々が集まった団体である。

この団体のユニークなところは、明確な目的をもたずに、新潟の街の魅力、誇りというキーワードを頼りに、街を学習し、街の資源を探し、街のマップに記載し配付する。さらに街を楽しむ機会を提供し、環境デザインの視点を通して、街の環境についての提案をしていこうというような、新潟の街に関することについて様々な取り組みを提案し、継続的な展開として組み立てているところにある。

さらに会のモットーとして、「予算があるから動くのではなく、必要なあることは動く。動けば資金はついてくる。」を掲げ、実践的に動いていることである。この実践的な動きを継続し続けることで、その活動は、市民事業として、「まちなか」の再生に向けての新たな可能性を導きだすものと、期待できる。

#### ■環境デザインへの期待

新潟市の「堀割再生物語プロジェクト実行委員会」と「にいがた寺町からの会」は現在、連動していない。しかし2つの動きが連動したとき、新潟市の景観を育む取り組みは、市民事業として成立するであろう。そしてその市民事業においては、環境デザインの役割は非常に大きい。環境デザインそのものを事業化していくことにもなるかもしれない。

市民活動的に始まった新潟のシンボルである万代橋をライトアップすることによって、橋周辺に信濃川の景観を意識した店が出店し、素敵な都市環境を創出するきっかけとなったように、これから始まる新潟の街の誇りを呼び覚ます取り組みへの挑戦は、環境デザインのアクティブなアプローチが不可欠なのである。



写真1



写真2



写真3

写真1：  
新潟市の中心を流れる信濃川で運航する水上バス「アナスタシア」。  
川面と人々の関係を多様にすることで新たな水辺の魅力を導き出す可能性を秘めている

写真2：  
かつて堀と寺町の街並であった新潟市西堀。現在その面影は埋もれてい

る  
写真3：  
にいがた寺町からの会が主催した「寺町散歩」。まず市民がまちの魅力を見発見することから始めている。

## 都市環境における車体広告について

田村 美幸

MIYUKI TAMURA

公共の色彩を考える会委員長

### ■首都の品格

東京都にラッピングバスと呼ばれる広告バスが走り出して約2年が過ぎた。それまでの東京都には、車体利用広告についての条例で、表示面積について、側部は1枚につき $0.3\text{m}^2$ 以下、縦の長さは0.5m、枚数は後部も含めて3枚という、かなり厳しい規制があった。戦後、東京の町を走る交通機関の車体広告とはを考えて、この既成を設けた人達としては、此れ以上は首都としての品位を守れないとぎりぎりのところで線を引いたのに違いない。おりしも、都の赤字財政改善を選挙公約に謳って当選した石原都知事の「空気を運ぶより、1円でも多く収入を！」の一聲で条例は改正され、車体を様々な広告で覆ったバスが走り始めた。当初240台だったものが今や694台となり、その数は増え続けるという。またバスのみならず、都電、地下鉄、JRの車両まで広告で覆われ、その数は止まるところを知らない勢いである。

### ■大型移動広告の問題

私が初めてラッピングバスを見たときのギョッとした視覚的ショックは、2年経った今も変わらず、慣れることはない。この視覚的ショックがどこからくるものか考えてみると、ほとんどの車体デザインは、雑誌や新聞広告をそのまま拡大してバスの車体に貼り付けているところからくるようだ。屋上廣告塔の看板は、遠く離れた地点から見られることを前提に、大きく作られている。街の中で、バスの車体のあんなに大きな広告を見せられるのは、歩いている者や隣を走っている者にとっては、たまたものではなく、また苦痛以外の何物でもない。

そんな大きな移動広告物が街中を走りまわること自体が不自然なのに、誰もおかしいと言い出さない。この2年間でラッピングバスに異論を唱えているのは私達の会だけなのも不思議な話だと思う。これまでの東京都の景観行政に関係している全ての人達が「ちょっと待って下さい」「みんなで考えようではないですか」と問題提起しなければならないのに、何故都の景観審議会の委員達は沈黙しているのだろうか。

### ■デザインの問題ではない

JUDIのメンバーの中にも、ラッピングバスのことを「ま、良いんじゃない」「バスより街の方が汚い」「バス代が上がるより」「もっとデザインの良いものなら」などと思っている方が必ずいらっしゃると思う。そういう方は“景観要素の中の屋外広告物について”や“街の中の移動広告媒体につ

いて”あるいは“東京の街の景観と屋外広告物について”などのテーマを掘り下げて議論したことが無い方ではないかと思う。公共の色彩を考える会は、約20年前の1981年、東京の都バスの色彩デザインに對して異を唱えて、バスの色彩デザインを変えた市民団体だ。しかし、今回の問題は色彩を含めたデザインの善し悪しを問題にしているのではなく、公共交通機関を広告媒体にすることに対して疑問を呈しているのである。都の財政が厳しいからと言って、それを車体広告料で何とかしようとする考え方方が問題なのだ。交通財政改善の為には、路線や時間帯を工夫して乗客の乗り易さを考え、バス利用者を増やすような努力をするべきだと考える。東京都の大事な街路景観を騒色によって汚している車体広告収入に頼って財政改善を測るのは、都民にたいする2重の裏切りではないだろうか。

### ■景観行政の後退

さらに東京都が屋外広告物の車体利用広告の規制緩和に踏み切ったことにより、待つてましたとばかり全国の都市で交通広告が蔓延してしまった。東京都が全国の景観行政に及ぼした悪影響の責任は計り知れない。

よく聞くのが、外国旅行から帰国すると、特にヨーロッパの都市を見てきた人が、日本の都市景観の酷さをなげくという話しである。それは、街並に緑が少ないと、広告物が多いこと、建物の高さや形、色彩がばらばらでまとまっていない事などから、日本は酷いという印象を受けるのだろうか。

1986年5月のOECDの対日都市レビューに「日本の大都市圏の多くで、アメニティ（地域の環境の快適さ、調和、一貫性）がかけており、屋外広告物の取締りなどが、OECD各国の基準に達していない」との指摘がなされたことは、都市環境デザイン会議のメンバーの皆様は勿論ご存知であろう。すなわち日本の都市景観は、国際的にみてマイナス評価を受けているのである。海外旅行から帰国後、日本の景観の酷さを嘆く、一般の市民の素朴な感想には、ちゃんと一理があるのである。

15年も前に既にこのような指摘をなされていながら、21世紀に入るなり、車体利用広告の規制緩和を行うとは、まさに時代の流れに逆行しているといえよう。「美しい東京に」を掲げて、日々と努力を続けてきた、東京都の景観行政の大きな後退に他ならないのである。

### ■効果的な広告を

都市景観を構成する様々な要素の中で、屋外広告物の色彩デザインが景観に対して重要な役割を果たしていることは、誰もが認めることだと思う。都市の中の屋外広告物をどう位置付けるか。広告主側から言っても、せっかく高い料金を払って広告を頼むのだから、その広告が効果的であって欲しいだろう。派手な多色使いで、我先に目立とうと自己主張し、競っている公共空間における広告の現状では、お互いがお互いを殺し合っているように思えてならない。稚拙なデザインで覆われたバスが小食にあふれた街中を走っているのを見て、消費者は本当に広告主に対して良い印象を持つだろうか。最近は、電車の吊り広告に、「当社はラッピングバスを走らせてています」という広告の広告があるのには驚く。

### ■景観行政には想像力を

景観とは歴史であると思う。そこに住む人の生活、文化、想いといったものの蓄積が景観に現れるといってよいだろう。

都市を形成する要素の一つ一つを大事に考えて、何かを決める際には、深い思考と未来に対する想像力を駆使しなければ、都市景観はあっという間に汚くなる。景観は長いスパンで考え、今下したこの決断が10年、20年先にどのような結果を都市に及ぼすことになるかを常に考えなくてはならない。

戦後、経済活動の一貫としての「広告」に寛容でありつけた結果が、現在の日本の都市景観である。日本の都市景観の現状をどう見るか。公共空間のあらゆる隙間を広告で埋めようとしている。心安らぐ快適な都市環境、成熟した都市とは程遠いと思うのは筆者だけであろうか。



## 仮囲いデザインの魅力

菊竹 雪

YUKI KIKUTAKE

(株)コンパッソ

### ■仮囲いデザインの魅力

昨今、工事現場で数々の個性的な仮囲いに出会うようになった。仮囲いに穴を開け現場作業を見せていくもの、広告として利用しているもの、アート作品を展示しているものなど。都市景観の中で仮囲いデザインが、ごくあたりまえの風景になりつつあることを実感する。しかし、工事現場を演出することが定着し始めたのは、ごく最近のことである。6年程前に仮囲いの規制が緩和され、広告媒体としての効果が認知されてきたこと。また、大型印刷が可能で耐久性に優れ、施工しやすく価格の安い粘着性シートが普及したこと。それにより、より自由な表現が可能になったことで、仮囲いに対する見方が変わってきたのだ。

### ■新たな価値の創造

仮囲いデザインは、新たな価値を工事現場に生みだす演出である。無地の壁であれば、そこはただ人が通り過ぎてしまう防御壁でしかない。ところがデザインを施すことで、その防御壁が突然「にぎわいをつくる舞台装置」になったり、「景観のサイン」として機能し始めるのだ。そのドラマティックな変貌が、仮囲いデザインのひとつの魅力といえるだろう。いくつか実際の施工例を紹介しながら、仮囲いの魅力について探ってみたい。

人の心を動かす、デザインと環境との関わり方があるのだと初めて感じたのが、1986年凱旋門を覆う仮囲いを見た時であった。フランス国旗をイメージさせる赤・白・青のトリコロールカラーの幕で凱旋門全体が覆われ、全く新しい景観をシャンゼリゼ通りに創り出していた。無彩色の幕で覆われた工事然とした凱旋門を想像すると、仮囲いデザインが景観に及ぼす力を感じぜずにはいられなかったのである。工事終了後には、使用済の幕を小片に切り分けてポストカードに貼り、実際に使われていたという証明をつけて販売したという後日談がある。

### ■街並みの表情づくり

仮囲いデザインによって新たな街の表情を作る場合と、街並みの表情を変えない工夫をする場合がある。

イタリアの天然ガス会社がミラノ市に展開した仮囲いデザインは、新たな街の表情を作ってきた好例である。1991年から現在に至るまで、作家フォロンと組んで「炎」をテーマに、天然ガスのキャンペーンを展開している。その一貫として仮囲い上に巨大な壁画が、ミラノの数々の工事現場に出現した。フォロンは、シンボルである炎を分

かりやすくやさしいイメージで表わし、なおかつ強く心動かされるインパクトを持つた壁画に仕上げた。そこには、企業名やコピーは本当に小さくしか入っていない。ここで注目すべきは、仮囲い上のアートで企業が社会貢献している点である。まるで街を美術館に見立て、そこにふさわしい絵画を飾るような形をとっているところが素晴らしい。

さて、建物外観を模写した仮囲いをヨーロッパで数多く見た。その手法は、職人の手によって模写されたもの、モダンなデザインに置き換えられたもの、写真で克明に再現したものなど様々である。外観を模写することは、街の景観・表情というものを大切にし、建物自体が持つ街の拠点サインとしての機能を、工事中も維持していく工夫の一つといえよう。

### ■CIの一環として

繁華街のブティックの内装工事などの際は、仮囲いがメッセージボードとして大きな役割を果たす。何がいつできるのか、工事内容を告知するだけでなく、商品そのものを宣伝したり企業のイメージを伝えることが有効な媒体になる。二つの例をあげてみたい。

一つはフランス・エルメス社の仮囲い。エルメスの店舗工事では、実際に使用されている茶色に縁取りされたオレンジ色のギフトボックスが仮囲いのモチーフになっている。ブランドイメージを端的に表現したデザインは、世界共通で使用されているようで日本でも使われていた。

もう一つは、1992年ミラノで見つけたセレクトショップの仮囲いの例。ユニークなオブジェが並べられた棚のデザインは「一体どんなお店ができるのか」という期待感を持たせる。オープン直後に早速訪ねたところ、ショッピングバッグや包装紙に、仮囲いのデザインがそのまま使われていたのだ。

一方はすでにブランドイメージが確立されており、他方は、ブランドが形成されていない。にもかかわらず仮囲いのデザインをCIの一環として捉えている点が先駆的であった。CIとして活用は、仮囲いの「見える価値」を創造していく一つの方法であるだろう。

### ■デザインの基本構想

仮囲いデザインは、現場独自のオリジナリティーを持ったものが断然面白い。仮囲いのユニークリーサルデザインも考えられなくはないのだが、独自のデザインと比べると魅力は半減する。なぜなのか、私は仮囲



写真1: パリ/凱旋門



写真2: ミラノ/天然ガス会社の広告 1999

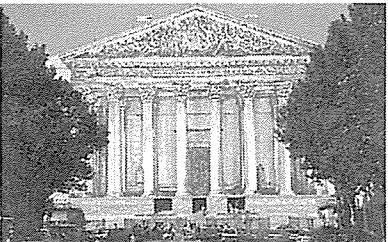


写真3: パリ/マドレーヌ寺院

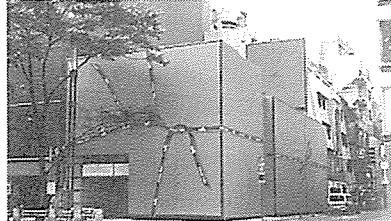


写真4: 東京/エルメス 2000

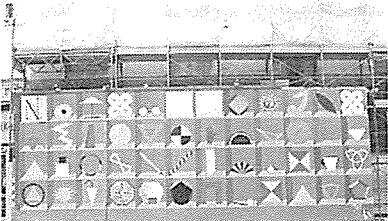


写真5: ミラノ/セレクトショップ 1992

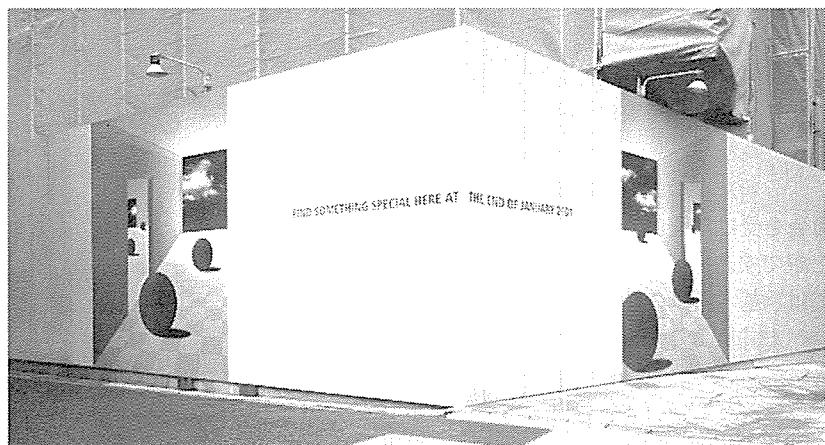


写真6: 東京/YM Square 原宿 Vol.2. 2000

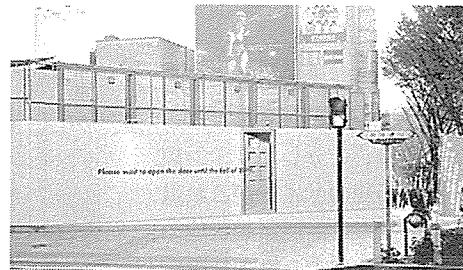


写真7: T's 原宿 1999

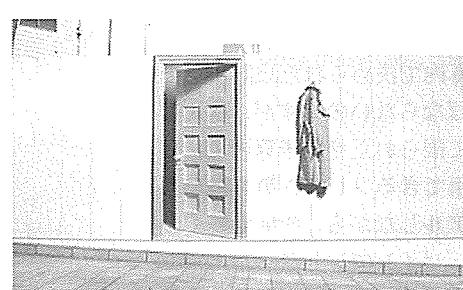


写真8: T's 原宿 1999

いデザインの基本構想を次のように考えている。

第一に、工事現場の場所、その周りの環境を意識したデザインであること。つまり、仮囲いの外との関係が、デザインに反映されることが大切である。

第二に、「何ができるのか」想像を喚起させるようなデザインであること。壁の外との関係に加え、壁の内側との関係はより重要で、建設中の建物への期待感を抱かせるデザインであるべきだと思う。

#### ■仮想空間

私は誰もが生活の中で目にするモチーフを選び、それを壁と関連づけて仮囲いをデザインしてきた。モノトーンでクールな表現の中に、人物は全く登場させないで、なおかつ人の気配や生活臭をほのかにただよわせたいと思っている。

さらに最近は「壁の奥に続く空間」を想定したデザインに取り組んでいる。仮囲いは、工事現場と鋪道を隔てる歴然とした壁である。高さが3mの壁はその存在だけで威圧感を与える。壁面にあたかも奥に続く様な空間をデザインすることで、壁の存在を曖昧なものにし、威圧感を軽減させる視覚トリックを考えている。

数々の工事現場で施工に立ち会い、ヴィジュアルが仮囲いに登場したとたん、街並みが急に活き活きしてくる光景を目の当たりにしてきた。仮囲いが舞台装置に変貌し、壁と人との関わりがデザインの力で生まれるのだ。私はそこにてつもない魅力を感じる。自由な表現が可能な仮設の特性をいかし、益々意欲的に仮囲いデザインに取り組んでいきたいと思う今日この頃である。

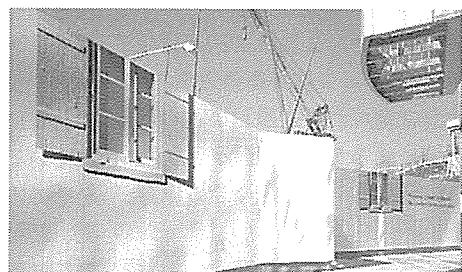


写真9: 大崎ゲートシティ

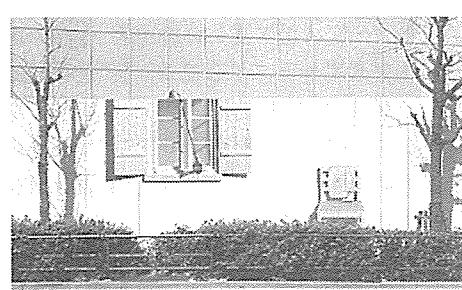


写真10: ゲートシティ大崎 2001

## 公共サイン整備 における リニューアルの試み

富山県下新川郡入善町

島津 勝弘  
SHIMAZU KATSUHIRO  
島津環境グラフィックス

### ■未知なる水資源

富山県東部に位置する入善町は人口約3万隣接する黒部市と共に、北アルプスの恵みをうけての黒部川扇状地湧水群は、全国名水百選にも選ばれ毎日30万トンもの地下水が湧き出る程、水源に恵まれています。入善町はこの豊富な水資源によって県内でも有数のコシヒカリの生産をはじめとして全国にも良く知られるジャンボスイカやチューリップなどの特産品の生産も盛んに行われています。

町では新たに、全国に向けてPRできる水資源として海洋深層水に着目し、富山湾の水深300mの深海より2度前後と安定した水温でさまざまな可能性を秘めた命の水としての深層水の新規利用研究を目的とした施設などを建設し、未知なる水資源による新たな地域づくりに向けてスタートを始めています。さらに、国の天然記念物に指定されている沢スギの保存と活用を図るために施設や水博物館の建設構想など水環境の保全と水を活用した地域づくりのプロジェクトを進めていて、町全体を水のミュージアムと位置づけ、行政と住民が一体となって「笑顔が水にうつる緑と文化のまち」づくりに取り組んでいます。

### ■リニューアルの試みに向けて

入善町では、そうした背景から海洋深層水のPR目的と新しく完成した施設への誘導のため公共サインの新たな設置が必要となり、町では補助金を受けて整備計画を進めることになった訳です。

計画手法としては、基本計画の設計事務所をデザインコンペ方式により決定する事となり、私共の事務所もこのコンペに参加させていただきました。当初の設計項目では、すべて新規設置によるものでしたが、入善町全体を調査してみると特産となるジャンボスイカやチューリップをモチーフしたシンボルサインから、表示の基準化がされていない公共サインなどが多数設置されていることがわかり、こうしたサイン類をそのままの状態で新規のサインがこれ以上、どんどんと増える事は黒部川扇状地の美しい景観を益々阻害することにもつながります。

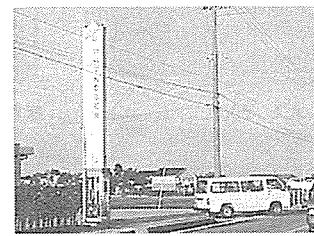
今回のような補助金による行政施策の場合どうしても予算内で決められた設計項目を処理しなければならないのですが、私共はコンペにおいて限られた整備予算内で、既存サインの使用できるフレーム等を出来るだけリニューアルしながら、如何に多くの既存サインをデザインコントロール出来るかという手法のデザインを提案させていた



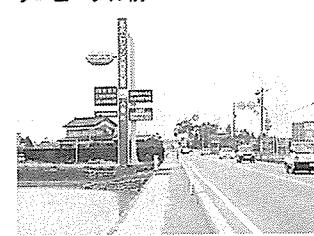
北アルプスの名水を蓄える120km<sup>2</sup>の巨大な貯水庫、黒部川扇状地。



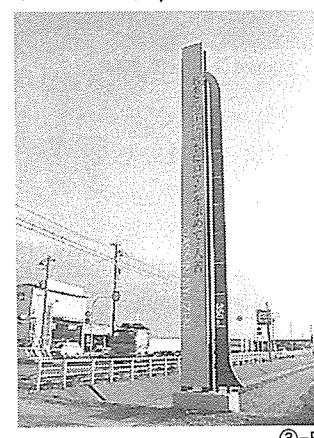
①



②



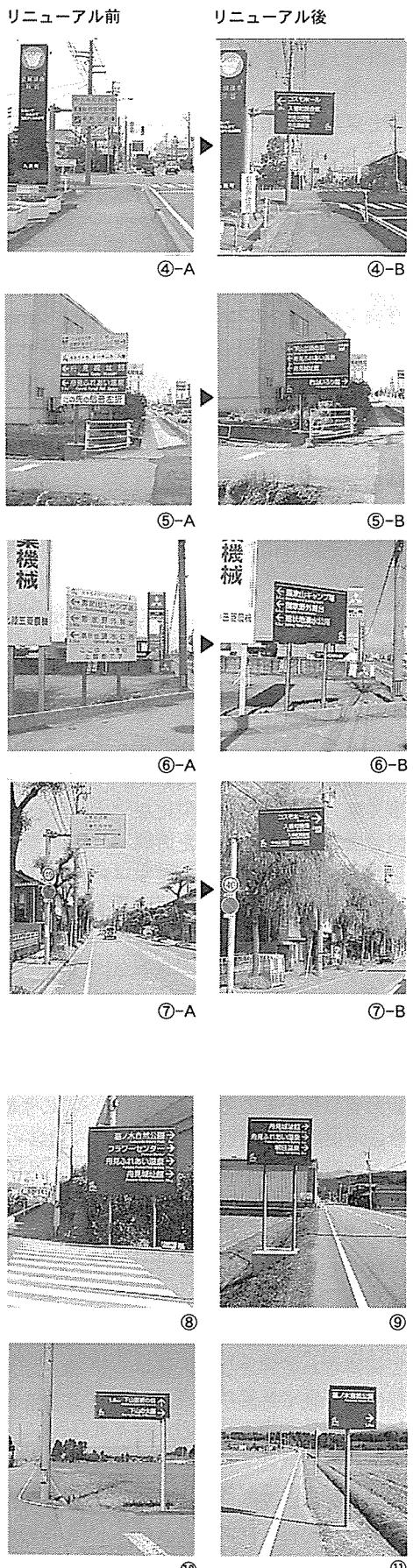
リニューアル後▼



③-B



名水と海洋深層水にロマンを求めて  
OASIS IN NYUZEN  
入善町



だいたい所、行政側に賛同をいただき今回の計画のスタートとなったわけです。

#### ■景観に配慮した公共サインの整理

入善町の主要導入口に設置されているシンボルサイン写真①～③には、町の特産品となるジャンボスイカやチューリップなどと合わせて名水の里をPRする内容が表示されており、町の中心を通過する国道8号線沿いや北陸高速周辺に多数設置されていました。設計概要では、そうしたサイン類はそのまま残した状態で、新たに海洋深層水をPRするサインを設置する計画となっていました。

そうしたサイン類の現況は、かなり退色も進み外装のパネル等はサビなども出ていて景観上は好ましくない状態でした。私共のデザイン提案は、サインをこれ以上増やさない方向で、少しでも町の景観に配慮したものとすることでした。幸いメインの鉄骨等は耐久性にも問題はなくそのまま使用出来たので、パネルだけのリニューアルでデザイン検討を行いました。まず、華美な装飾が目についていたサインの写真③-Aを、基本フォルムは残しながら海洋深層水が深海から汲み上げられているイメージとし、写真③-Bのようにデザイン変更を行いました。新規のサインをデザインするのとは違い、多少問題も残りますが景観を考えると、これ以上サインを増やさないという考え方と限られた予算を有効に使う事が重要でした。

写真④-A～⑦-Aに見るように、町内の誘導系サイン類もデザインの統一が図られておらず、色彩もレイアウトもバラバラな状態でした。当初の予定では、この誘導系サインも新たな公共施設への誘導として、新規の大型誘導を4基設置する予定でしたが、町内全域を調査してみると、表示面の統一が図られていない写真に見るような、誘導サインが40カ所程設置されていました。

老朽化の激しいものは撤去を行いましたがポールが使用できる箇所は、そのまま既存のポールを利用しながら、色彩と表示面のデザインの統一を行い、写真④-B～⑦-Bのようにデザインの変更を行いました。写真⑧～⑪のようなタイプや新規設置のものも含め、大型誘導4基で組んでいた予算で最終的には24基をリニューアルする事が出来たわけです。現在の状況下では、市町村レベルにて景観施策に予算づけする事は厳しく、今回のような公共サイン整備なども同じことで、如何に限られた予算を有効にいきるかが、これからは求められるのは無いでしょうか。

## 情報化社会の景観を考える

山本豊津

HOZU YAMAMOTO  
東京画廊主

私は美術商という仕事柄、見ることそして見いだすことについていつも注意を払っています。

他の人が、今まで見たことのないような作品を搜して来ることを本分とし、価値の種となる作品を手に入れると、微力ながら時間をかけて育てます。

しかし、ここ十年ほどの交通手段と情報技術の目覚ましい発達によって、世界の同一傾向化が急速に推し進められ、結果としてオリジナリティー豊かな作品が生まれにくくなっています。

そのような近頃のこと、仕事もやりにくくなるなと思いつつ、ある事に気が付きました。青い鳥の物語ではありませんが、価値あるものは身近にあったが既に消えつつあるということです。それらは日本の近代化の過程で、私達日本人の生活には不必要と烙印を押されました。いくつかあるなかでもかえって大きすぎて気が付かないのが日本の風景です。

数千年の歴史を経て創られてきた日本の風景は、二十世紀で壊滅的な状況になってしまったといつても過言ではありません。

村起しの仕事で地方へ出張すると気になることで、田園の風景もある限られた方向に目を向けると美しい情景が残っていますが、ほんの少し首を左右どちらかに回しただけで見苦しい建造物が視野に入り、気分が殺がれてしまいます。

改めて言うまでもなく風景はその土地の文化が時を費やして表現した作品と言えるもので、私たちはその風景を通して伝えられてきた文化を養分として、実のある生活を営みながら、その地に固有な風景を維持して次の代に残していくかなければなりません。

それにもかかわらず、日本の文化的景観が惨憺たる現状になってしまった主たる原因是、農業にあります。

日本の風景は農耕によって創られ、農耕を営む人によって保持されてきました。我が国の政策は、近代化を急ぐあまり産業化政策を過度に進め、減反に次ぐ減反をくり返して農業を捨てたのです。

ではすべての国で、近代化は風景を破壊したのかと問えば、そうでもありません。産業化社会の先達であるヨーロッパの国々を訪れると、大都市はおおむね近代的な景観に変わっていますが、一歩でも都市を離れると、現在でも数百年前からの風景を残しています。

小さな地方都市も、それを囲う田園地帯も、美しい風景を保持しつつ落ち着いた文

化的環境に、人々の暮らしが営まれています。このような環境・風景が残されているのは、農業が国家の政策によって生かされているからです。人々は農業に誇りをもつて従事しています。

さらにドイツは、農業政策ばかりでなくエネルギー政策も180° 転回させ、原子力発電所のこれ以上の設置を止め、今後縮小するようです。ドイツより先に進む北欧三国は、自然環境保全に教育とエネルギーの両政策を国策の最重要点課題としています。文化的な教育は国民の自制心を養うためにも必要不可欠となり、芸術の役割が見直されることになります。

二十世紀の重高長大な産業化社会から生まれた工業の役割を限定し、二十一世紀の情報化社会に向かって、社会構造を組み替え環境の回復を計らねば、人類の生存に危機が訪れるであろうことは、誰でも分かることです。

さてもう一度日本の風景に話を戻します。国土全体にかつての美しい風景を再現することはかなり難しいことで、日本の国造りを再構築することを抜いてはありえません。しかし、新しい考え方をすれば都市部に関しては、次代の景観を創り出せるかもしれません。

私も多くの都市開発事業の景観計画にアート計画として参加しました。

都市の再開発事業は、様々な用途に使われる施設を、建築物のデザインに色彩計画や照明計画・植栽計画・アート計画を一つずつプラスして景観を創ってきました。

この景観を創るシステムはどの再開発事業においてもほぼ同じであるために、結果的に、どの市街地も同じような景観となってしまいます。これは近代資本主義社会の分業化とコスト主義がもたらす必然的な結果で、しかも、短期的ですべて完成されることが絶対の条件ですから仕方ありません。これが二十世紀の日本の典型的な都市の風景だと思います。そして、その上で改めて東京を眺め次代の景観について考えてみましょう。

私が最もホットでコンテンポラリーな町の景観と感じるのは、秋葉原の電気街です。この町は、日本を訪れる外国のアーティストたちが、すぐに駆け付ける場所です。恐ろしい程に消費的世界が視覚化し、まるでポップアートの世界です。秋葉原町は世界のどこにもない町です。

次に興味を惹かれるところは青山・銀座・丸ノ内など、圧倒的な広さと数のショップを出現させている世界のブランドが集まる

街です。

どの店舗も、同じ意志を持っているかのように限られた素材と色彩を用い、できるだけ装飾性を排除してデザインされています。美術的にはモダニズムの究極的表現であるミニマルアートの世界が具現化されています。

三つ目は、町とはいえませんが東京ディズニーランドです。

ひと時の快楽的空间に浸るバーチャル的景観です。ここでは、絶えず景観を動的に展開させ、時間と体力とお金を消費させて精神的充足感を擬似的に体験させています。現代の極楽庭園と名付けてもよいのではないかでしょうか。

これら三つの魅力的景観は等しく商業的空间で、景観の演出は購買意欲をおこさせるように仕組まれています。美しく見えるのは景観を創る側の意志が貫徹しているからだと思います。

しかし町の本来の景観は、人間の消費を促すためだけの役割ではなかったはずです。かつて景観・風景は人を育て創造力を生起させる大切な役割もありました。

すなわち先の三つの景観のようにアーティスティックな空间ではなく、アートを生み出すような風景空间です。そのような空间は、空间を構成するハードを幾重にもプラスする従来の方法では造られません。

むしろ空间を運営していく仕組みによって時間をかけて生み出されるのです。その場合、運営ソフトの仕組みは、管理的ではなく意志的でなくてはなりません。

二十世紀の終り頃からヨーロッパの各都市で進められている都市の改造は、誰にでも理解できるように意志的であり、ハードよりもソフトに重点を置いて計画されています。昨年、招待を受けたロンドン南地区の再開発の中心的施設であるテートモダンなどは、その最右翼と言っても過言ではありません。

さて、日本の小さな景観計画として新しい風景への修正のためにわかりやすい方法が二つあります。それは経済の成長に沿って公共事業として各地に様々な施設が建設されました。多くの施設は運営の予算もなく必然的にソフトもつくれず使用のないままになっています。

そこで第一案は今までのプラス思考からマイナス思考に方向を転じて、不要な施設を新しい公共事業として壊し、埋もれてしまった日本の風景を再生させることです。日本の昔の風景をテーマパークのように再生させることができれば、日本の文化を好

む世界の潜在的ファンは移住してくるかもしれません。日本民族に限ることなく、日本の文化を愛する人で、この国を運営するなどということは高度に発達した情報化社会ならではのアイディアと思いませんか。第二案は情報化社会でこそ実現しなければならない方策で、運営などのソフトを公共事業として開発し、景観計画を姿形からイメージするのではなく、人々が楽しく集まれる仕掛けから発想することです。ソフトはエンターテイメントと芸術が主となるには違いありませんが、芸術系の仕組みづくりには公的な資金援助を必要とします。

しかし地方の自治体と仕事をしていますが、現状では企画の立案やその運営など長期的展望を必要とするものほど予算が付きません。施設などの建設費と比べても予算はほんの僅かだというのにです。

それでもようやく新しい動きが現れてきました。行政だけに頼るのではなく、企業のメセナや個人のボランティアを活用して、人々が目的を持って集まれる空間が出てきたことです。

私自身も横浜駅西口のポートサイド地区で、行政・民間企業・各国大使館・学校・個人などを組み合わせるオルタナティヴスペースを八年間運営してきました。このスペースの活動は、ポートサイド地区の硬質な都市空間にオアシスのような情景を提供してきたと自負しています。

以上二つの案へは、風景の原点を見直すことから、景観計画を始めようとして至りました。

風景の原点は人の想像力に刺激を与え、そして行為の消費を持って表現できる生きた空間です。都市の中では暮らす人達と訪れる人達とのコミュニケーションによって、都市を離れると自然と人とのコミュニケーションによって、生きた風景が維持され続けられるでしょう。

その時、芸術行為は人と人、人と自然のコミュニケーションのためのツールとして再評価されるようになります。

ヒューマンコミュニケーションの背景となる環境が今、求められていると思います。昨年から私のワークフィールドである銀座の景観を変容させる企画をすすめており、本年には商店会・企業・画廊・学校などの協力を得て実行する予定です。

その折は、皆様方のご協力を節にお願いします。

## ブロック例会レポート

### ■東北ブロック

中居 敬一

NAKAI KEIICHI

東北ブロック幹事

株中居敬一都市建築設計

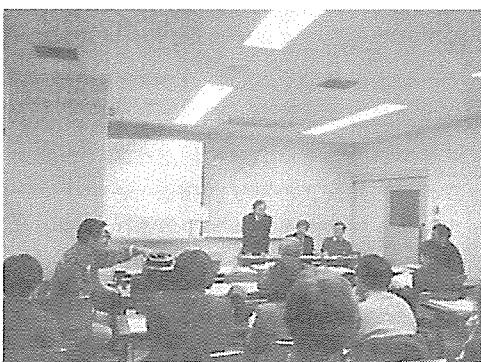
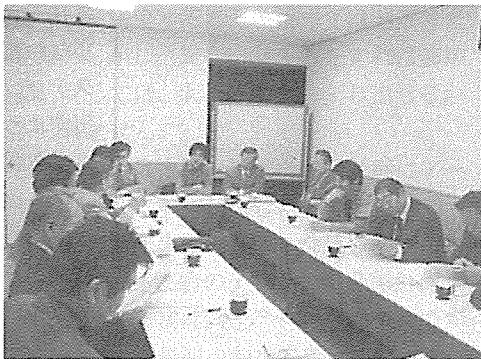
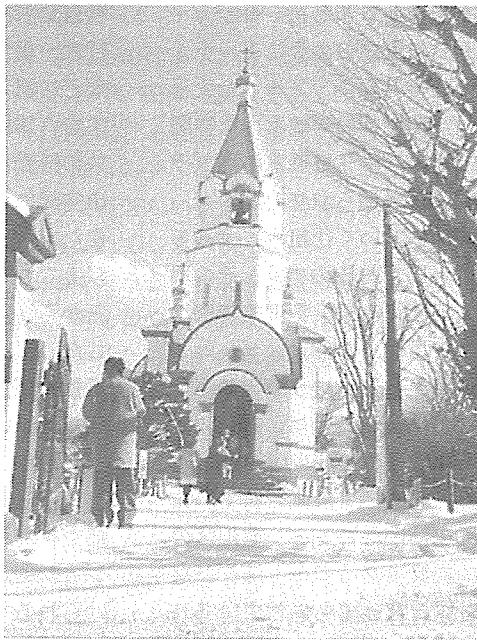
#### ■JUDI東北ブロック近況報告

東北ブロックの正会員は総勢14名という他ブロックに比べ極めて少人数で活動している訳ですがその内訳は岩手が8名、宮城が5名、青森1名という構成で秋田、山形、福島に会員がいない状況です。先般行われた『公共空間利用実体調査』も会員のいない地区の調査には大変苦労した思いがあり、是非、東北6県には少なくとも各県2名～3名以上の会員が欲しいと痛感しているところです。全国レベルでも会員が余り増加していない事を考えるとなかなか難しい気もしますが何方かお知り合いがあれば勧誘をして頂ければ助かります。こんな東北ブロックの昨年度の活動は北海道ブロックとの合同交流会を函館で開催した事が最大のものでした。平成14年2月16日～17日にかけての1泊2日の行事でしたが『町並みフォーラムin函館』と題して地元、函館の市役所まちづくり推進課長山本真也氏、ペンキ十字軍世話役の北海道大学森下満氏、ロッパコ（北大の学生、6人の若手アーティスト団）、東北ブロックか

らは中居（盛岡の景観を生かしたまちづくり）等のパネリストで市民を交えて意見交換を図り有意義なフォーラムが開催できました。又、夜は湯の川温泉での懇親会では大いに盛り上がり次回は盛岡で交流会をやりたいとの意見も出る程でした。このよう

に成功裏に終われたのはひとえに段取り、準備を行ってくれた北海道ブロック幹事の柳田氏のおかげと改めて感謝申しあげます。

今後の活動も『北』をキーワードとしたいろいろなサークルや地域との交流が出来たらと考えているところです。又、4月1日にブロック総会を盛岡で開催しました。14名中10名の出席をみて、新年度の活動方針、新役員の選出を行ない、新たな幹事には宮城の齊藤浩治氏が就任する事となりました。当日は本部から伊東氏、八木氏の両代表幹事が参加され地域活動の実体と課題について貴重な意見交換と大いなる懇親が図られ、少人数ブロックにしてはかつて無い盛り上がりを見せた総会となりました。



### 訂 正

JUDI 63号の1頁右段中程と2頁表-2の中で、「MM21ポートサイド地区」の表現は誤りで、「ヨコハマポートサイド地区」が正しい表現です。MM21とヨコハマポートサイド地区は隣接しているものの別々の地区であり、ここに訂正させていただきます。  
(広報・出版委員会)

### 広報・出版委員会

澤木 俊尚	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	加茂みどり
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康